ミニボート：リトルボート　免許不要でも
これだけの知識は必要

JCG
酒田海上保安部

お手軽に持ち運べて、水上を満喫でき、免許不要が魅力のミニボートですが、転覆・衝突・海流に流されて帰れない、燃料欠乏で漂流するなど事故が多く発生しています。

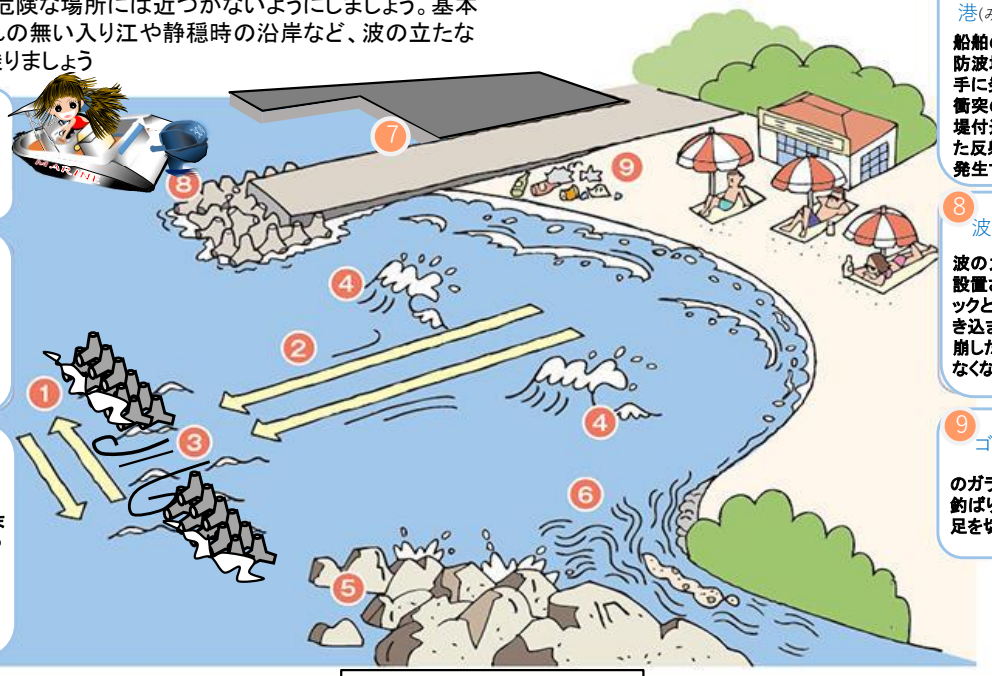
近くにサポートできる船が居ない場合は無理をせず、流された場合の対処もできるようにしておきましょう。

海をあなどらず、安全で楽しくマリンレジャーを楽しんでください。

海では風の向き、波のサイズ、潮流といったコンディション選びが大切です。また、様々な形で多くの人が海上で活動していますので、海域の特徴、ルール・マナーについてマリンショップや漁協に確認しておきましょう

海のチェックポイント

海は、気象や潮流、地形によって刻々と変化します。
波や潮の流れなど人力だけではどうにもならない力を持っているので、危険な場所には近づかないようにしましょう。基本的には流れの無い入り江や静穏時の沿岸など、波の立たない場所で乗りましょう



1 潮流(ちょうりゅう)
潮(しお)の満ち干きで、水の高さや流れ(方向・流速)が変わる

2 離岸流(りがんりゅう)
岸から沖に向かう流れで、地形や波、風の方向や強さによって様々なところに発生し、つかまると岸に戻れない

3 沖提(おきてい)
消波や波が入るのを防ぐ目的で設置されていますが、この周りでは波の高さや流れが急速に変化するので近寄らない

4 まき波(ダンパー)
海底が急な斜面だと波が一気に大きくなり崩れて巻き込まれ、海底にたたきつけられる

5 磯・岩場
岩場に打ち寄せた波がかえるなど流れが複雑になる、付近が浅いので急な大波(一発波)が発生する

6 河口(かこう)
川が海に合流するところで、沖に向かう流れが強く、複雑な流れとなっている

7 防波堤(ぼうはてい)
港(みなと)
船舶の往来が多く、特に防波堤の陰に入ると、相手に発見されにくく、船と衝突の危険。また防波堤付近では堤に当たった反射波により大波が発生する

8 波消しブロック
波の力を弱めるために設置されているが、ブロックとブロックの間に引き込まれてバランスを崩したり、挟まって動けなくなる恐れあり

9 ゴミ・漂着物
のガラスのかけらや釣ばり、貝殻などで足を切る恐れあり

絵：日本赤十字社HPより

ミニボートの事故そして気を付けること

酒田海上保安部

夏に向かうにつれ、ミニボート（リトルボート）が目立ち始め、衝突事故も起こっています。
元々、このボートは米国フロリダ州マイアミ湾などの波が無い平水に近い場所で乗るために作られたもので、日本の環境下で使用するにはそれなりの装備（サイドフロートは必須）とコツと知識やルールが必要です。
最低限守りたい12事項をまとめてみました。
海をあなどらず、安全で楽しくマリンレジャーを楽しんでください。

ライフジャケットは必ず着用

ミニボートに乗る際は、安全のため必ずライフジャケット（赤色などの明るい色）を着用しましょう。

荷物を積みすぎない

水面から舷縁までの余裕高が無いので荷物は少なく・軽くを心がける

立たない

転覆・落水の一番の原因がオシッコ時（特にゴムボートは海面まで遠いので乗りだした際）、加工したペットボトルなどで対策を！

夜間は船を出さない

全周灯等の法定設備の点灯が必要なのと、点灯しても小さく、他船から発見されにくく危険

旗や笛やサイレンで存在を知らせましょう

3m以上の高さの旗をつけましょう
接近する船には間髪入れず笛やサイレンで存在を知らせましょう

岸の近くで乗ろう

手漕ぎで行ける範囲が限度です。予備の燃料も忘れずに（1時間くらいで尽きます）専用の携行缶を使用すること！

急に変わる気象に注意

海の波風は急に変わります。出港後も気象サイトや“※海の安全情報”でこまめなチェックを！

救命胴衣と落水後の保温が重要

浮いていられること、体温の温存が生死を分ける！転覆した船から離れて泳がない（発見が遅れる）服そうは化繊系の保温素材の服やウエットスーツで！

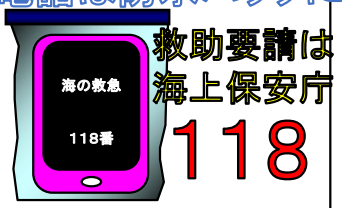
前だけ見ていてはダメ

360度、常に目を配ること

ロープ・バケツ・オールは必需品

船内に水が入った時の排水、エンジンが止まった時のオール、曳航用のロープは必須！その他使い道多数！

電話は防水パックに



防水携帯の性能を過信しない、いざ使えなければ意味が無い

後進には気をつけろ

水面から舷までの高さが無いため、勢い良く後進をかけると押し波で船内に大量に水が入る

気象変化を見るツール

※検索：“海の安全情報”は海上保安庁の提供しているサイトです

スマホがあれば便利なのが
“天気と風と波. JP”　（iPhone専用無料アプリ）
“釣り天気. JP”（サイト）
“Ｗｉｎｄｙ”（サイト）
アプリ以外でも周囲の空をよく見て雨雲が近づく、雲の流れが速くなった、風向きが変わった、湿った風が吹いてきたなど天候悪化のサインを見逃さないように。ラジオを聴いているのも良いでしょう。